

冥顯論からみた「御堂」

——『栄花物語』法成寺を中心に——

川 本 豊

はしがき

いま再び「冥界／顯界」という世界観が問われ出している。近代合理主義の全盛期には顧みられることはなかったが、ここに至って、その行き詰まりとともに、深層を連綿と流れ続けていた「冥」界が再び取り沙汰されることになったと考えられよう。「顯界」とは明るい世界つまり我々の生きている日常・現実世界であり、それを超えた非日常・非現実世界を「冥界」と呼び、字義通り暗い世界とする。この世界観は、当時の人々が感受していたイメージであり世界像である。池見澄隆氏は、両者のまなざしの関係は冥界からの一方的被透視性をその特徴とし、「みえない―みられる」という齟齬性⁽¹⁾がその基本構造であるとされる。我々の立つ顯界からいえば、こちらからは見えないが、向こうからは全的に見られているのである。長岡龍作氏も「近代以前の歴史空間は、多くの場合閉じてはいない。見えない他界への回路を必ずや孕んでいることが予想されるのである⁽²⁾」と指摘する。

この心理イメージとして大きな広がりを持つ「冥／顯」世界像と、住まい感覚として日常的でフィジカルな側面

を持つ〈奥〉^③という分析概念との、きわめて近い類縁性に思い至ったのである。そこで〈奥〉をキーワードとして、平安期から鎌倉期にかけての文学作品を中心に、そこで展開される「他界感覚」と「住まい感覚」との関係性を読み解くという作業を通して、その構造のゆらぎの中から、心性の持続と展開を確認できるのではないかと考えている。本稿では、藤原道長の生涯を中心に展開する歴史物語とされる『栄花物語』をとりあげて、道長が発願・建立した「御堂」（法成寺）を中心に、その目的・意味について〈奥〉論に即して考察を行いたい。

さて木村純二氏は、『栄花物語』は一般に「道長を中心とする撰閲家の栄花を賛美的に描いた物語」と概括されがちであるが、その目線は、師輔から道長に至る藤原北家の主流から疎外された人々の悲しみに対しても深い共感を向けている。^④とされ、まず道長と時代を同じくする『往生要集』（九八五年成立、恵心僧都源信（九四二〜一〇一七年））における人間存在の位置づけを概括されたのち、それとの比較対象として取り上げた『栄花物語』についてこのようにとらえている。そしてさらに続けて「人々の喜びにも悲しみにも深い共感を示すがゆえに、かえってそこから超出しようとする志向をもたない。人生の一つ一つの場面において一喜一憂し、「苦を憂へ」「楽に暮す」人々の姿を共感的にたどることのみを目指している。」（一六頁）と述べる。そこには理念だけではとらえきれない、あるいは無視できないものとして、人間の情念の世界にも注目されているのである。

筆者は、「住まい感覚論」と位置づけて、建築学的形態論とは少し距離をおいて、わが国の「住まい」について研究を続けている。それゆえに木村氏の当時の人々への視線に共感を覚えるのであり、ここで『栄花物語』を取り上げて論ずる所以もそこに求められよう。

一・『栄花物語』について

ところで『栄花物語』は歴史書と位置づけられるのであろうか、それともそのタイトルが示すように物語なのであろうか。深沢徹氏は、「確実な「史料」に基づく、客観的な「事実」の積み重ねにより、唯一の「正しい」歴史叙述が可能だとする信憑のもと、自らの学問的営みを正当化してきた近代の実証主義史学は、(中略)歴史の「真実」を追求するため、説話や伝承のたぐいを、信用のおけない「物語」として極力排除してきた。しかし、単なる年表やデータベースの類ならいざ知らず、わたしたちによってなされる歴史叙述は、つねに何らかの因果関係に基づくストーリー展開が不可欠で、そのぶん、ことば遣いに大きく依拠している。つまりは「歴史叙述」と「物語」は地続き⁽⁵⁾なのであるとする。

そのような中で、漢文による正史「六国史」が第五八代光孝天皇の時代までで途絶しているのを継承する意図をもって、第五九代宇多天皇の御世からの編年体のカナ書きの「歴史―物語」として『栄花物語』は登場してきたとされる。それはさらに後一条天皇までの約一四〇年間を描く三〇巻の正編(成立は一〇二八年頃か)⁽⁶⁾と、以後の堀河天皇までの約六〇年間を描く一〇巻の続編とにわかれるとされている。そのうち正編の執筆者は、赤染衛門とするのが定説となっているが、確かな外証がなく、続編についても推測の域を出ていない。正編の作者とされる赤染衛門⁽⁷⁾は、道長の室倫子に仕えており、宮廷事情にも明るく、それゆえに記述されたそれぞれの出来事は自らの体験したりアリテイ⁽⁸⁾が感じられるとされるが、一方で退屈な史実の羅列に終わるともいわれており、文学史においての評価は概して高くはない。編纂の目的としては、外戚政治によって権力を一身に集めることになった稀代の政治

家としての藤原道長の栄華を賛美することに主眼が置かれていることは本文からもうかがえる。たとえば、編年体の歴史物語とされながらも、「巻一月の宴」において第五九代宇多天皇から第六四代円融天皇までの約八五年間が一気に述べられる。次いで「巻二花山たづぬる中納言」において円融天皇から第六五代花山天皇までの一五年間が述べられている。一方で「巻十七 おむがく」が法成寺金堂落慶供養の三日間の記述に費やされるのは対照的である。また「史料」との齟齬も指摘されるところであり、先に引用したように、書いた主体のことば遣いに依拠する物語として位置付けられよう。

この歴史物語の特徴の一つとして、全篇を通して、多くの人々の誕生とともに、じつに多くの死が描かれているかと思ひ知らされることである。ほとんどがその記述に費やされているといっても過言ではない。誰々が亡くなった、次の段では何某が生まれたと、延々と生と死の記録が繰り返される。当然のことながら道長の縁者（身内）が中心ではあるが、道長本人もその例外ではない。すなわち、正編の最終巻とされる「巻三十 つるのはやし」は道長の薨去をもって閉じられる。史実はもちろんであるが、作者からみれば、歴史とはまさしく生と死の交錯する時間の流れということになるのであろう。そして同巻最終段に「次々の有様どもまたまたあるべし。見聞きたまふらむ人も書きつけたまへかし。」(③一八三頁)と書きつけられ、後人にゆだねて正編は擲筆されるのである。

ここで強調されるのは、悲しみの感情であろう。その記述は作者の才あるいは志向にも左右されているのかも知れないが、歴史という事実を扱いながらも、情感が理よりも勝っているといえる。たとえば、東宮尚侍となつた道長の娘嬉子は万寿二年(一〇二五)親仁親王を出産し、人々は喜びに沸くが、時をおかずして急逝する。十九歳とある。道長一家の悲しみはいかばかりにや、それでも葬送は作法通りに行われている。落胆を隠せない道長に院源座主が諭す。そのときの道長の発した言葉が以下である。

卷二十六 楚王のゆめ

「一八」「いかがは。さ思ひとりてはべりや。されどそれがただ恋しきなり」とのたまはするままにも、御目より水精を貰きたるやうに続きたる御涙いみじうて、山の座主も泣きたまひぬ。(②五二九頁)

この「ただ恋しきなり」という言葉である。理は理解している、しかし理も何もない、その言葉の内にあるのは、ほとぼしる感情のみである。ここにも道長の姿の一側面が素直に表出されているのではないか。このようにある意味で、理は冷静には理解しつつも、情には勝てない生身の人間味を持ち合わせた道長を中心に記述されている『栄花物語』から、当時の住まい感覚を探り出してみたいと考える。

なお、本文の引用は、梅沢本を底本とする、山中裕他校注・訳『栄花物語①②③』(へ全三冊)新編日本古典文学全集三一〜三三(一九九五・九七・九八年 小学館)による。(傍線は引用者)

二・泣く道長

三人の娘が立后し栄華を極め、そこでつとに知られる「望月の歌」を披露した道長であるが、前節で一部述べたように、その頼みとする娘に先立たれることになり、大いに嘆き苦しむことになる。ここで万寿二年八月の嬉子、そして万寿四年(一〇二七)九月の妍子薨去の場面における道長の様を確認しておきたい。⁽⁹⁾

まず先にも一部取り上げた、産まれて間もない若宮を残して逝った、嬉子の場合である。道長は御帳の中で添い寝をし、泣きながらの看病であった。

卷二十六 楚王のゆめ

「九」殿の御前（道長―引用者補以下同じ）、上の御前（倫子）、今ぞ泣かせたまふ。「若宮あながちに若ういはけなくて幼き御身の、いづちとてふり離れては、われらを捨てておはしぬるぞや。いみじき鬼神なれど、人の許さぬをば率ていかざんなるものを。返したまへ」と泣きまろばせたまふに、御乳母小式部の君は、「こをば捨てさせたまひつるか。御共に参らん、御共に参らん」と泣きののしる。（②五一〇頁）

「一六」殿の御前思しめしわびては、

かの世にはわれよりほかの親やあらむさてだに思ふ人を聞かばや

小式部の乳母、

心だにこの世にかなふものならばますらんさまもゆきて見てまし（②五二〇―一頁）

第九段、道長は嘆く、いったいどこへ（いづちとて）行つてしまわれるのか、私たちをお見捨てになるのかと。また、乳母の小式部も同じく、私をお見捨てになられるのか、お供させてくださいと。ここでは、「いづち」に注目しておきたい。亡くなったのち、どこへ行くのかが漠然として明示されていない、あるいはまだそれについての共通認識がないとも考えられる。しかし、第一六段の和歌にみられるように、道長は「かの世」といい、小式部は「この世」と詠み継ぐのである。少なくとも、この世のほかに、それ以外のところとして「かの世（あの世）」は認識されていたとみてよい。我々がいうところの、頭界に対する冥界ともいえよう。それがどこになるかはわからなくとも、小式部はそこに「行つて様子を拝見したいものよ」と、さほど遠い存在とは思っていないこともうかがえる。道長は、寛弘二年（一〇〇五）に源信の『往生要集』を藤原行成に書写させており、その冒頭にある「大文第一に、厭離穢土とは、それ三界は安きことなし、最も厭離すべし」、あるいは「欣求浄土」といった理には接していたはずである。しかし、娘の死に直面して（これはいわゆる二人称の死といえる）、理を超えて悲しみの情感

が勝ってしまったのである。むべなるかなである。そこに道長の人間性の素直な一面を見る。それがまた彼を第一人者に仕立て上げた原動力の一つかもしれないのである。

次いで、妍子の場合はどうか。いよいよとなり、湯浴みをし、戒を受け出家をし、阿弥陀仏を唱えながらやがて息が絶える。ここでは同じく道長の様子についてみておく。なお時をおかずして、同じ年の暮れに道長もこの世を旅たつことになるのである。

「二〇」うせもおはするままに、殿の御前、「あな悲しや。老いたる父母を置いて、いづちとおはしますぞや。御共に率ておはしませ」と、声をたてて泣かせたまふに、この里にまかでたりし人々も、いつのまにか参り集まりたりけん、いといみじう揺りみちたり。(③一三一頁)

殿の御前、御衣をひきのけつつ見たてまつらせたまひて、「そらごとこそおぼゆれ。やや」と申させたまひ、御数珠を押しもませたまひて、「仏の心憂くもおはしますかな。今まで生けさせたまひて、かかる目を見せさせたまふこと」と、言ひつづけ泣かせたまふとも世の常なり。(③一三二―三頁)

ここでもさきほどの嬉子の場合と同様の言葉が発せられる。年老いた父母をさしおいて、いったいどちら(いち)へ行かれるのだ、それならお供に連れて行ってください、と声を立てて泣きながらに言う。さらに、宮の亡骸に覆いかけておいた御衣を引きのけて、いまだに信じられないのかのように、しげしげと見ては、また泣かれる。その際の言葉は、「仏の心憂くおはしますかな」である。こんどは頼みにした仏に向けられる。それを恨めし気に言いつつまた泣かれる。仏にも恨み言を発してしまうほどの悲しみゆえにか、最後の言葉「世の常なり」で結ばれる。当時の人々の心情として、これだけ大きな悲しみに襲われた時、この仏に対する言い分も、ここでは肯定的に受け止められているのである。

三・仏堂建立について

まず時代は遡るが、『日本書紀』¹³に次のような記述がある。

卷第二十九 天武天皇下 十四年（六八五年）三月

壬申に、詔したまはく、「諸国に、家毎に、仏舎を作りて、乃ち仏像及び経を置きて、礼拝供養せよ」とのたまふ。（二〇六頁）

同書注記によると、「諸国每家」とは国府をいい仏舎を国分寺の起源とする説もあるが、校注者はここでいう「家」とは、以下の持統天皇の条とあわせて考慮するならば、公卿等の私宅とし、そこに仏殿を設けることを命じたものと解すべきとされている。（二〇七頁）

卷第三十 持統天皇 五年（六九一年）二月

二月の壬寅の朔に、天皇、公卿等に詔して曰はく、「卿等、天皇の世に、仏殿・経藏を作りて、月ごとの、六斎を行へり。天皇、時時に大舎人を遣して問訊ひたまふ。朕が世にも之の如くせむ。故、当に勤しき心をもて、仏法を奉るべし」とのたまふ。（二七〇～一頁）

しかし、そこにおいて祈られたことは、やはり官寺での祈りと同じように、国家すなわち天皇を頂点とする体制の安寧、鎮護国家や五穀豊穰などの国全体に関わることであったであろう。

次いで、藤原道長と時代的に重なる「池亭記」¹⁴の記述をみておく。

予本より居処なく、上東門の人家に寄居す。常に損益を思ひ、永住を要めず。縦ひ求むとも得べからず。その価値二三畝千万銭ならんか。予六条より北に初めて荒地を卜し、四つの垣を築きて一つの門を開く。(中略) 隆きに就きては小山を為り、窪に遇ひては小池を穿る。池の西に小堂を置きて弥陀を安ず。池の東に小閣を開きて書籍を納む。池の北に低屋を起てて妻子を着けり。凡そ屋舎は十の四、池水は九の三、菜園は八の二、芹田は七の一なり。(中略) 予行年漸く五旬に垂として、適小宅有り。蝸はその舎に安んじ、虱はその縫に樂しむ。(中略) 家主、職は柱下に在りといへども、心は山中に住むが如し。(中略) 朝に在りては身暫く王事に随ひ、家に在りては心永く仏那に帰す。予出でては青草の袍有り、位卑しといへども職なほ貴し、入りては白紵の被有り、春よりも暄く雪よりも潔し。鹽漱の初、西堂に参り、弥陀を念じ、法華を読む。(中略) (九〇〜一頁) 予暮齒に及びて、小宅を開き起つ。これを身に取り分に量るに、誠に奢盛なり。上は天を畏れ、下は人に愧づ。またなほ行人の旅宿を造り、老蚕の独繭を成すがごとし。その住まふこと幾時ぞ。ああ、聖賢の家を造る、民を費さず、鬼を勞せず。(中略) 天元五載孟冬十月、家主保胤、自ら作り自ら書けり。(九八二年―引用者補)(卷十二、記・三七五)(九二〜三頁)

道長とは身分が異なり下級官僚である慶滋保胤も、ようやく手に入れたその自宅の様子とともに、繰り返し繰り返しそこに建てた小堂(仏堂)のことを記述しているのである。しかしそこでの祈りの対象は、もはや先のおよそ三百年を隔てた『日本書紀』の内容と異なることは否定できない。

四・「御堂」をめぐる

では『栄花物語』に沿って、「御堂」について、道長の発願から建立への流れをみておきたい。

巻第十四 あさみどり

「二一」世のはかなさにつけても、殿はなほ、いかで本意とげなんと、督の殿東宮に参らすることをせばやと、世を危く思しめす。(②一六三頁)

引用書頭注によると、道長の出家願望の初出部分とされる。しかし、自身の出家（聖なる願望）と、嬉子を東宮妃にという俗世での執着とがまだ並置されているのである。

巻第十五 うたがひ

「三」年ごろの御本意、ただ出家せさせたまひて、この京極殿の東に御堂建てて、そこにおはしまさんとのみ思さるるに、「このたびおこたらせたまへらば、かぎりなき御有様にてこそは過ぐさせたまはめ、さればいか」とのみ、親しき疎き、ややましげに思ひ申したるもことわりに見えさせたまふ。宮々（彰子・妍子・威子―引用者補）などみなおはしまし集まらせたまひて、さし並びよろづにあつかひきこえさせたまふ。この世の御有様、なべてならずめでたくおはします。(②一七四頁)

道長の住まいの一つである京極殿（土御門第）は、東京極大路に沿った南北に二町、東西に一町の広さ（通常の敷地の二倍となる二町家）があったと想定されている。（邸内には仏堂もあったことが『権記』からうかがえる。）京内に僧坊は憚られるので、道長は京外となる大路を隔てた東隣の土地に御堂建立を念じたことになる。¹⁵なお、こ

こでいう御堂とは阿弥陀堂（無量寿院）を指すのであろう。

〔七〕この御悩みは、寛仁三年（一〇一九年）三月十七日より悩ませたまひて、同二十一日に出家せさせたまへければ、日長に思さるるままに、さるべき僧たち、殿ばらなどと御物語せさせたまひて、御心地こよなくおはします。今はただ、いつしかこの東に御堂建てて、ささしう住むわざせん、となん造るべき、かうなん建つべきといふ御心企みいみじ。かくて日ごろなるままに、御心地さはやぎ、すこし心のどかにならせたまうて、昨日今日ぞ宮々御方々におはします。「今はおこたりにてはべり。大宮、中宮疾く内裏に入らせたまへ。さうさうしくおはしますらん」と、そそのかしきこえさせたまへど、大宮は、なほしばしと心のどかに思されたり。中宮ぞ疾く入らせたまふ。殿は、御堂いつしかとのみ思しめす。この世のことは、今はただかの御堂のことをのみ思しめさるれば、摂政殿もいみじう御心に入れて、掟て申させたまふ。（②一七九〜一八〇頁）

〔九〕摂政殿（頼通）国々までさるべき公事をばさるものにて、まづこの御堂のことを先に仕うまつるべき仰せ言たまひ、殿の御前（道長）も、「このたび生きたるは異事ならず、わが願のかなふべきなり」とのたまはせて、異事なくただ御堂におはします。方四町を廻りて大垣して、瓦葺きたり。（②一八二頁）

巻第十六 もとのしづく

〔八〕入道殿は、御堂の西によりて阿弥陀堂建てさせたまひて、九体の阿弥陀仏造りたてさせたまひて、この三月（寛仁四年一〇二〇年）に供養せさせたまふべしと、いみじういそぎののしりて、宮々（彰子・妍子・威子）などもおはしますすべければ、柳、桜、藤、山吹などいふ綾織物どもをし騒がせたまふ。（②二二三頁）

ここでは阿弥陀堂の落慶供養が三月に予定されているとのみあつざりと書かれており、当日の記述はない。金堂の落慶供養の記述との落差は、歴史物語としての故であろうか。

卷第十八 たまのうてな

「一」御堂あまたにならせたまふまに、浄土はかくこそはと見えたり。例の尼君たち、明暮参り拝みたてまつりつつ世を過ぐす尼法師多かるなかに、心あるかぎり四五人契りて、この御堂の例時にあふわざをなんしける。

「二」御堂に参りて見たてまつれば、西によりて北南さまに東向きに十余間の瓦葺の御堂あり。(②二九九頁) 冒頭の「御堂」はそれぞれのお堂の意であろうが、堂の数が増えるに連れて、極楽浄土の様子に近づいていると述懐する。しかし、この世に擬似的に現出する浄土(異界と位置づけられる)であることを意識していることは、文章からもうかがえる。なお以降の「御堂」は阿弥陀堂を指しているのであろう。

ところで道長はその栄華とは裏腹に、その権力の影の部分として、じつに多くの身内とくに自身の子どもに先立たれることになる。このことについては、さきに道長の心情の側面からみておいた。ここでは極楽浄土に擬せられたこの世での豪華な「御堂」を現出しながらも、なお割り切れない心理的側面があった。ここでは、さきと同様に皇太后宮(妍子)崩御までの部分を再び取り上げ、その記述から法成寺内での場所の推移をみておきたい。

卷第二十九 たまのかざり

「九」薬師堂よりは北の端、大御堂(金堂)よりは東に、檜皮葺の御堂造らせたまへる。中三間は高く上げ、南、東三間は廊造りにぞ造らせたまへる。(中略)殿の御方(道長)は、五大堂の辰巳の隅の方に、御簾かけておはします。女院(彰子)、殿の上(倫子)は薬師堂の北の廂に西かけておはします。関白殿(頼通)をはじめ、この殿ばら(道長の子息たち)は、薬師堂の東の高欄の下の上に、円座敷きて次第に並みさせたまへり。皆薄鈍の御直衣、指貫にておはします。(③一一八〜九頁)

これは万寿四年六月、百体の釈迦如来像の完成をまつて、これらを新造の御堂（釈迦堂）に遷座する様子である。道長の身内たちのみが集い、それぞれに応じて場所をあてがわれていることがわかる。

「一二」かくてのみやはとて、御堂の五大堂に籠らせたまひて、御修法せさせたまはんと思しのためはす。その御堂の北面に廂させたまふべきさまによるづ造りののしりたまふにつけても、いとあはれなり。（③一二二―三頁）

「一四」八月十三日、御堂に籠らせたまはんとて、女房のなりつくろはせたまふ。（中略）さて渡らせたまひて、五大堂の東の廂、北面かけておはします。殿の御前（道長）は、この同じ御堂の戌亥の方の間におはします。宮の侍には、大御堂の北の廂に屏幔引きてぞしたる。御修法五壇始めさせたまへり。（③一二四頁）

八月になり、ますます宮の容態は悪くなる。「つゆ物をきこしめさねば、今はただ影のやうにおはします」有様である。そこで、五大堂にて御修法を計画する。その場面である。ここでは母屋を廻る「廂」の間が、それぞれの居場所であることがわかる。¹⁶⁾

次の第十五段は、彰子がやはり薬師堂の北の廂に渡られて、たまたま宮と対面されて、仏の御験と喜ぶ場面である。ここでも廂の間が居場所となっている。

「一五」その暁に女院（彰子）渡らせたまひて、薬師堂の北の廂にぞおはします。一品宮（妍子娘）、上の御前、辰巳の方へおはしますに、宮のおはしますほど五六間渡るを、宮の御前よくゐざり出でさせたまへれば、あさましようあはれにうれしう見たてまつらせたまふ。仏の御験と見たてまつらせたまふ。（③一二六頁）

「一八」「すべて今は何ごとも験もなし。いかで枇杷殿にて、生くとも死ぬとも」とのたまへど、「いかでか御病の起りし所へはおはしません。御物の怪の思はせてまつるなめり」とて、九月七日の暁にぞ、今南殿に渡

らせたまふ。御堂にてはさりとともと思しめつるに、おこたらせたまはずなりぬるを、殿の御前も心憂きことに思しめたり。寢殿の東面に御しつらひしておはします。(③二二八〜九頁)

結局、仏の力も及ばず、いよいよ宮(妍子)は自分の「家」である「枇杷殿」に戻りたいと望むが、親の心情としてはそれもならず、母倫子が新造した今南殿に移る。ここでは「寢殿の東面」とあるので母屋の東半分を居処としたことになる。しかし人々の願いもむなしくついに九月に薨去する。その場面はさきにみた。以下は、それ以後の葬送と四十九日の法事の場面である。第二段の板敷をとりはずして、地面に居るようにしていること、第二段では、法事をやはり阿弥陀堂にて執り行っていることが注目すべきことであろう。

〔二二〕さて御車に乗せたまつりてかき出すほど、この御声ども、推しはかるべし。一品宮、東の廊の板敷下ろしておはしますべきなれば、さしあひていみじ。乳母たち、え参らず。宮の、御声え忍びあへさせたまはず。(③二二六頁)

〔二七〕かかるほどに、はかなく二十七日になりぬれば、阿弥陀堂に堂莊嚴、御しつらひなどせさせたまふ。まだ暁に殿の上の御前、一品宮、一つ車にて渡らせおはします。殿の御方、宮など、女房車二十ばかりあり。(中略)おはしまし着きて、この堂の北の方の廊に下りさせたまふ。(③一四四頁)

では道長は、自分との位置づけとして、どのようにこの「御堂」をとらえていたのであろうか。先の妍子の部分とはあとさきになったが、次にその部分を引き出してみたい。

巻第十八 たまのうてな

〔三〕東の廂の中の間ぞ、殿の御前の御念誦の所にはせさせたまへる。三尺ばかりの御障子を一重に張らせた

まひて、北南東の方に立てさせたまひて、上にも同じさまにて覆はせたまへり。一所おはしますばかりの広さにて、内の御座の高さ四寸ばかり上がりたり。(②三〇二頁)

〔四〕また蓮の糸を村濃の組にして、九体の御手より通して、中台の御手に綴めて、この念誦の処に、東さまに引かせたまへり。つねにこの糸に御心をかけさせたまひて、御念仏の心ざし絶えさせたまふべきにあらず。(②三〇六頁)

〔五〕殿の御前、御堂の事など仰せられて、「人々しばし出でたまへ。心のどかに念仏せん」とのたまはすれば、殿ばらみな御方々へ帰らせたまひぬ。殿の御前御念仏させたまふ。そのほど例の礼盤に僧一人さぶらひて、経読みたてまつる。(②三〇八頁)

ここでは道長の念仏の「場所」の詳細に注目してみたい。やはり母屋ではなく、東の廂の間に、西側を除く北南東の三方を囲い、さらに上方(天井)を覆っているのである。その広さは一人が居られる程度で、内部の御座所床面が四寸(約一二センチメートル)ばかり上がっていると記述される。正確な形状はこれだけでは不詳であるが、少なくとも狭い閉じこめれる空間となっていることは推測できる。阿弥陀堂という現世に写し取られた(仮想)浄土の中で、そこに阿弥陀仏のおわす母屋という中心と、その外側周縁の東廂の間、そこに道長は念仏の場所を設えているのである。一重の障子(高さ三尺とあるので約九〇センチメートル程度か)という緩い囲いでもって仕切られており、この場所はまさしく「異界」と呼べよう。そこで道長はただ一人、蓮の糸で阿弥陀仏とつながり、二人称の相手として、念仏を通して向き合うのである。柱間十一間ともされる壮大な阿弥陀堂と、道長の日常の念仏の場所とを対比したとき、その境界・あわいにまさしく異界性が垣間見られるのではないか。それによって道長は、この世(顯)と浄土(冥)とを交感可能になっていると考えられよう。そこに〈奥〉との類縁性をみるのである。

卷第三十 つるのはやし

「七」かくて、日ごろにならせたまへば、「本意のさまにてこそは、同じくは」とて、阿弥陀堂に渡らせたまふ。もとの御念誦の間にぞ、御しつらひしておはします。高き屏風をひき廻して立てさせたまひ、人參るまじく構へさせたまへり。ことなる事なければ起き上がりさせたまはず。(③一五五頁)

「二一」ただ今はすべてこの世に心とまるべく見えさせたまはず。この立てたる御屏風の西面をあけさせたまひて、九体の阿弥陀仏をまもらへさせたてまつらせたまへり。(中略)すべて臨終念仏思しつづけさせたまふ。仏の相好にあらずよりほかの色を見むと思しめさず、仏法の声にあらずよりほかの余の声を聞かんと思しめさず、(中略)御手には弥陀如来の御手の糸をひかへさせたまひて、北枕に西向きに臥させたまへり。(③一六二頁)

正編最後の巻である。臨終に近いことを自覚した道長は、かねての思い通りにするべく、さきに見た自らが発願・建立し、日々念仏を唱えていた阿弥陀堂に移る¹⁸⁾。そして同じ場所ではあるが、日々の念仏の場合とは異なる高い屏風(引用書頭注では、高さ「六尺」とあるので約一八〇センチメートル程度と思われる)をひき廻して、まさしく臨終念仏に専念する¹⁹⁾。仕切りの程度は異なるのであるが、あわいとしての異界性はなんら変わらない。そして日頃の念仏の時と同じように、一人となることを望み、作法通り、念誦の間から浄土へと旅立つのである。その場所は、同じく東廂の間である。計算されたように、北枕に西向きに臥す道長の目には、母屋の弥陀如来に向き合い、さらにその向こうへ奥には西方浄土が観想されているのやも知れない。

「一四」今は出でさせたまふ。無量寿院の南の門の脇の御門より出でさせたまふ。かの釈迦入滅の時、かの拘

尸那城の東門より出でさせたまひけんに違ひたることなし、九万二千集まりたりけんにも劣らず、あはれなり。
(中略)万寿四年(一〇二七年)十二月四日うせさせたまひて、ついたち七日の夜、御葬送、御年六十二にな
らせたまひけり。儀式有様に夜もただふけにふけてゆく。(③一六七〜八頁)

いよいよ出棺の時。自らが選びとったその場所である無量寿院の脇御門より、釈迦になぞらえて葬送の列は出発する。

むすび

本稿の発端は、「お内仏²⁰」という言葉との遭遇である。現代では、主に真宗・浄土宗系統において仏壇の意味として使われているようであるが、ここではその「内」という語に注目することになった。仏壇というコンパクトな祠堂を各家の中に置くようになった(仏間と称して専用の室もある)のであるが、これもまたテーマとする〈奥〉すなわち「異界」に通ずるものではないかという疑問が持ち上がったのである。

法成寺は、『栄花物語』の記述や、貴族の日記類、そして現在も続く発掘調査などから、壮大な規模の伽藍であったことがわかる。しかし道長にとっては阿弥陀堂(無量寿院)の建立が最大の目的ではなかったか。来世への橋渡しの場所として、そこに自らの占める位置を求めたと考えられるのではないか。言い換えれば、両界である「冥／頭」の境界・あわいとしての「異界」である。その落慶供養には実の娘である三后のみが集って、親子水入らずでいわば内々で行っている。以後の諸堂造営は、道長の権力のなせる業であり、それ故に金堂供養の際には天皇の行幸を仰ぎ外向きに行ったのであろう。道長の自筆とされる『御堂関白記』には無量寿院の落慶供養までが記され

ているのである。

本稿では、道長にとつての「阿弥陀堂」の位置づけを考察し、当時（現世）の人々が念願してやまない浄土とのあわいとして、「異界」との類縁性に注目しつつ〈奥〉論の視点から概観した。しかし、理念として源信が述べるような浄土への希求が成熟するには、次の時代を待たねばならないことが、道長の言葉の端々からもうかがえたのである。

註（出版年は便宜上、引用者において西暦年に統一している。）

（1） 池見澄隆編著『冥顕論 — 日本人の精神史 —』法藏館 二〇一二年

本稿での「顕界」および「冥界」という言葉の使用については、右記「序」にかえて（七〇―八頁）に拠っている。平易には「この世」と「あの世」とも言えようが、空間性のみならず時間性も含んだ総体概念として表象するため、ここでは右記を使用している。さらに「顕界」における「冥界」の現われ（可視的な冥界的領域）を「異界」と称している。（二二頁）異界の使われ方は論者によって様々であるが、ここでは右記に倣う。

（2） 空間史学研究会編『空間史学叢書1 痕跡と叙述』岩田書院 二〇一三年（三頁）

（3） 分析概念としての〈奥〉については、以下の拙稿により検討を重ねた。

・「院政期における〈奥〉の精神的考察 — 『讃岐典侍日記』（上巻）を中心に —」

・「〈奥〉の精神的考察 — 『讃岐典侍日記』（下巻）における時間・空間 —」

以上二篇は『佛教大学院紀要』（二〇一〇年・二〇一二年）における時間・空間

・日本印度学仏教学会第六三回学術大会（二〇一二年七月 於：鶴見大学）

「へ奥」の考察 ―貞慶『愚迷発心集』の心性―

・日本宗教学会第七二回学術大会（二〇一三年九月 於：國學院大学）

「中世日記文学にみる「被（かづ）く」の宗教性 ―へ奥」の視点から―

(4) 木村純二『往生要集』と『栄花物語』―日本の思想風土と仏教の葛藤の一断面―

『国士館哲学 第五号』国士館大学哲学会 二〇〇一年

「『栄花物語』においては、妻や子といったかけがえない者の死を一つの喪失のあらわれとして、他の喪失と一般化させることは拒否されている。源信の「厭離穢土」の思想は、各自が具体的経験として持つ「苦」を通じて普遍性を目指すように説いており、大上段から教義を押し付けるような質のものではない。それでも、『栄花物語』は近しい者との交わりの実感を手放そうとはしない。そこにおいては、近しい者とともにある生こそが生きることを意味付けているのであり、それを一歩でも一般化し抽象化することはその意味を損なうものととられているのであろう。」

(一九頁)

この部分は、「住まい」を考えるうえでも重要であろう。「ともにある生」とは、まさしく「住む」ことに通ずるといえる。

(5) 深沢徹『歴史物語と歴史叙述』（二二二―二二二頁）

小峯和明編著『日本文学史 古代・中世編』ミネルヴァ書房 二〇一三年

(6) 正編の成立年については、一〇三三年説（大津透『日本の歴史〇六道長と宮廷社会』講談社学術文庫 二〇〇九年）、あるいは一〇三六年説（佐藤弘夫編『概説 日本思想史』ミネルヴァ書房 二〇〇五年）と、これも若干の推定幅がある。

- (7) 正編の作者とされる赤染衛門については、鴨長明『無名抄』に和泉式部と比定する形で述べられており、これについては拙稿「鴨長明における「制作」について——『無名抄』を中心に——」（『建築制作論の研究』中央公論美術出版二〇一六年）において取り上げた。
- (8) 小西甚一『日本文学史』講談社学術文庫 一九九三年（八一頁）
- (9) 万寿二年七月には小一条院女御寛子が逝去しているが、その記述には存外淡々としたものがある。（巻第二十五みねの月）その一つには、明子腹ということで、倫子との関係も影響していると考えられよう。
- (10) 拙稿（注3）の『讃岐典侍日記』においても、大弐の三位の「ただおはしますらんところへわれを召せや」の言葉を検討した。事実史として『栄花物語』とは約八〇年近くの時間的隔りがあるが、両者にはまだ大きな変化はないものと思われる。近しい人の死を受容するための「死後再会」観には、やはりもう少し時間が必要だったのであろう。
- (11) 倉本一宏『藤原道長の日常生活』講談社現代新書 二〇一三年（二二二頁）
（藤原行成『権記』寛弘二年九月十七日条）
- (12) 源信著・石田瑞麿訳注『往生要集』岩波文庫 一九九四年
- (13) 坂本太郎他校注『日本書紀（五）』岩波文庫 一九九五年
- (14) 慶保胤「池亭記」後藤昭雄他校注『本朝文粹（抄）』新日本古典文学大系二七 岩波書店
- 慶保胤の極官位は従五位下、大内記であり、下位であっても殿上人であった。なお「池亭記」成立の頃は、まだ位階は六位とされ、宅地の規模は四分の一町見当であろう。それでも現代的に言えば千坪余の土地となり、池・亭を配置するには十分と考えられる。
- 隴谷寿「王朝期の住まい——里内裏と京の風景」（参考文献②）（二六頁）
- 当時は「如法一町家」といわれ、三位以上の公卿が一町（約四千三百坪）の敷地をもつことができた。

(15) 福長進「法成寺造営と『栄花物語』」倉田実編『王朝文学と建築・庭園』竹林舎 二〇〇七年

「御堂」はもっぱら法成寺もしくはその中心に位置する金堂を指して用いられ(二九二頁)とあるが、ここでは阿弥陀堂と解釈しても不自然ではないのではないか。

(16) 「御堂」内においては、道長以下高位の人々の居場所であっても廂の間が中心となる。

(17) 『栄花物語』巻第三 さまざまのよろこび

「五四」(兼家薨去) 東三条院の廊、渡殿をみな土殿にしつつ、宮、殿ばらおはします。(①一七四頁)

このように、調度類の裏表を置き変えたり、日常とは異なって、板敷を取り外して土の上に居ることで、死に向き合おうとしていたと考えられる。

(18) 鳥居本幸代『千年の都 平安京のくらし』春秋社 二〇一四年(二九七頁)

「死期を悟った道長は境内の東に位置する五大堂から橋を渡って南池のなかに設けた中ノ島に至り、さらに西にかかる橋を渡り、西の阿弥陀堂に移り、念誦の間を病床とした。」

この道長が歩んだ阿弥陀堂への道のりが、「橋」という、冥顕両界をつなぐものとして、異界性を帯びたところを通過していることも留意すべきであろう。

(19) 池見澄隆『増補改訂版 中世の精神世界―死と救済』人文書院 一九九七年

臨終行儀および臨終念仏に関しては、同書付論1・2において、『栄花物語』から、道長の場合について、源信『往生要集』との関連を取り上げられている。(一七八頁)

(20) 「内佛(仏)」の語意については以下がある。

寺院で、庫裡に安置している仏。また、持仏。『角川古語大辞典』

冥顕論からみた「御堂」

寺院で、本堂以外の私房に安置した仏像。また、一般在家でも、居室に仏像を安置して信仰する風を生じた。念持仏。『日本語大辞典』小学館

なお同大辞典の次項目には、「内仏壇」があり、「本堂でなくて住職の居間にある仏壇。内仏を安置する」とある。

〔参考文献〕

- (1) 池見澄隆『慚愧の精神史―「もうひとつの恥」の構造と展開―』思文閣出版 二〇〇四年
- (2) 日向一雅編『源氏物語と平安京 考古・建築・儀礼』青蘭舎 二〇〇八年
- (3) 西山良平『都市平安京』京都大学学術出版会 二〇〇四年
- (4) 杉山信三『院家建築の研究』吉川弘文館 一九八一年
- (5) 市川秀和「越前の民家にみる仏間の空間構成について―住まいの聖なる場所と象徴的意味に関する一考察―」
『福井大学地域環境教育センター研究紀要 第一七号』二〇一〇年
- (6) 西村謙司『臨終の住まいの建築論』中央公論美術出版 二〇〇九年
- (7) 長谷川宏『日本精神史 上』(第十二章 浄土思想の形成) 講談社 二〇一五年
- (8) 倉本一宏『藤原道長「御堂関白記」を読む』講談社選書メチエ 二〇一三年
- (9) 池見澄隆／斎藤英喜編著『日本仏教の射程 思想的アプローチ』人文書院 二〇〇三年